

## 話題は参与構造にどう影響するのか？： 教員ミーティングの談話を例に#

内田 らら\*<sup>1</sup>

### How Much Do Topics Affect Participation Structure?: From the Analysis of Conversations in A Faculty Meeting

Lala Uchida\*<sup>1</sup>

**Abstract:** This article focuses on a faculty meeting by four members, each of whom has different latent status. I make clear the difference in participation structure in topic development between "topics giving shape to agenda" and "secondary topics for the agenda". To put it concretely, in the former, a person highest in latent status leads a topic to a conclusion. In the latter, on the other hand, without regard to participants' latent status, a person who has more knowledge or information on a certain topic chiefly develops the topic and others cooperate with him or her. Moreover, it is pointed out that a sense of position influences whether the members expand their topics by giving priority to the relationship among participants or to the amount of information they have.

#### 1. はじめに

人々は、会話を通じて言葉をかわし、情報の受け渡しや対人関係の樹立などを行っている。しかも、彼らは好き勝手に脈絡のないことを話すのではなく、ある話題に沿って発話のやりとりを行っている。しかし、その話題は終始一貫しているとは限らず、時間の経過と共に、その場の参加者が持つ意向などに影響されて派生したり変化したりする。そして、話題の変化を通じて、さらに多く話す人が出たり、逆に聞き手にまわる人が出たりすることから、参加者がどう話題に貢献するかに関する構造、すなわち、参与構造は必ずしも一定ではないと想定される。

実際、Tannen (1984) や Watts (1991) は、話す権利が比較的均等な日常会話を分析し、話題<sup>1</sup>による参与構造の変化を指摘した。しかし、実際には話す権利が均等な場面ばかりでなく、各参加者の社

会的地位<sup>2</sup>が異なり、その順位づけが明確なために話す権利が不均等になる制度的場面も存在する。ところが、先行研究では、制度的場面でも「話題に対する参与構造の違い」が同様に見られるかどうかは分析されていない。その一因として、制度的場面は形式的であるため、参加者の社会的地位が常に発話の配分に反映される<sup>3</sup>と考えられていたことがあげられよう。しかし、果たして、本当にそうであると言い切れるのだろうか。

そこで本論文では、制度的場面の1つである教員ミーティングをとりあげ、その談話に見られる「決定事項の具体化に寄与する話題」と「決定事項の周辺にあたる話題」という2種類的话题で参与構造がどう変化するのかを明らかにする。

<sup>2</sup> 本稿では、「教授」「助教授」「助手」という職業に伴う順位づけを指す。

<sup>3</sup> 内田・小笠・金・森下 (2000) は、教員ミーティングを分析し、各参加者の社会的地位はパワー行使で固定化されず、その都度相互行為で作られる動的なものと指摘した。しかし、それは参加者の意図が達成されたか否かの見地から分析されており、話題に応じた参与構造は扱われていない。

<sup>1</sup> 参加者同士のやりとりで言及対象となるある特定の事柄。(cf. 村上・熊取谷 1995:101)

\*<sup>1</sup> 東京工芸大学工学部基礎教育センター非常勤講師  
2004年9月2日 受理

## 2. 先行研究

### 2.1. 制度的場面

制度的場面は、組織や制度という「外形的」(好井 1999:36) な影響を持つものをいう。これを扱った先行研究には、語彙の選択や話順などの会話現象がどう現われるかを述べた Drew and Heritage (1992) や制度的場面に見られる立場の非対称性が権力といかに関わるかを示した Diamond (1996) などがあげられる。しかし、いずれの研究も、「制度」の特異性を明示しようとするためか、状況や話題を問わず、制度性による拘束の結果生じる一定の言語や行為の特徴を記述することに留まり、単一の場面での個々の話題に現われる「参与構造の多層的側面」は明らかにされていない。

### 2.2. 話題と参与構造

#### 2.2.1. 日常会話のデータから

Tannen (1984) は、パーティーの食卓における初対面同士の会話を分析し、何を適切な話題と考えるかは個人によって異なり、会話が協調的に進行するか否かは、各参加者の会話様式にかかっていると主張した。また、Watts (1991) は、家族の会話を分析し、各参加者は、話題と対人関係という 2 つの共起する側面を交渉させつつ、自分が思う方向に話題を展開させようとしていると指摘した。この Watts (1991) の見解は、1 個人のコントロールによって話題への参与構造が変化しようという考えにつながるものと思われる。

しかし、いずれの研究も日常会話を対象にしており、参加者に制限を加える制度的場面は、Tannen (1984) が示した個人の会話様式や Watts (1991) の主張する個人のコントロールだけでは説明しきれず、社会的状況とより密接に関係する側面が存在していることが考えられる。

#### 2.2.2. 会議のデータから

一方 Yamada (1992) は、銀行の中間管理職の会議という、より制度的な場面での会話に焦点をあててその話題展開を日米比較した。そして、話順の配分状況の違いが話題構成に反映することを示

した。具体的には、アメリカ英語話者は、1 人の話順が長く、参加者間で均等に話順を配分せず、自分が提示した話題で最も高い割合で話順をとる傾向にある。一方で、日本語話者は、1 人の話順が短く、誰が話題提供者でも各参加者が均等に話順を配分する傾向にある。

ところが Yamada (1992) は、どの類の話題でも同様の傾向が見られるとしており、状況や話題に応じた参与構造の違いを全く考慮していない。そればかりか、日米各々の話者が持つ「会議や相互行為自体がどうあるべきか」に関する文化内知識や文化的背景との深い結びつきを話題展開の日米相違の原因にしている。しかし、複数の参加者が会話に加わっているのなら、時間の経過などにより、その場にいる参加者の意向や会話の状況が変化すれば、それに伴い話題も変化する可能性があると考えられる。従って、異言語間(異文化間)で話題展開を比較する時にも、話題に応じた参与構造の多層性をふまえて行うことが大切であろう。

## 3. 目的

前節でとりあげた先行研究は、その場の状況や話題に即して会話が進行するという考えに欠けているようである。この考えは、社会的地位や話題が固定して見える制度的場面でも、時の経過と共に参加者同士の関わり方などの影響を受け、その場で話題が変化する可能性を示唆している。従って、この示唆に沿った研究は、任意の状況でより円滑に会話を進行させるためにとるべき方法を見いだす上で避けては通れないものと筆者は考える。

そこで本稿では、教員ミーティングでの話題における参与構造について、以下の 2 点を分析と考察で明らかにしていく。

- (1) 話題への参与構造はどのようなものか。特に、教員会議において社会的地位が最も高い A はどの話題でも常に同様の参与方法をとるのか。
- (2) 話題ごとに参与構造が異なるのなら、それは何に起因しているのだろうか。また、そこには何の関係しているのだろうか。

## 4. データ

本稿は、1999年11月に関東地区の某4年制大学で行われた教員ミーティング(約90分間)のオーディオテープによる録音資料を分析対象にする。参加者は、A(教授兼学科主任)、B(助教授)、C(助教授)、D(助手)という<sup>4</sup>、各々の間に社会的地位の違いが存在する4名で、議題は「退職教員(以下e)の記念講演と懇親会の運営法」である。ここで、データ収録の際、分析者は会議に同席せず、また、議題や議事進行に関しては予め何の指示も与えないで、参加者間で決定した内容に委ねた。なお、話題については、議題を中心とした方向性の観点から、大きく①「決定事項の具体化に寄与する話題」と②「決定事項の周辺にあたる話題」に分類する。このうち、前者には「記念講演を遠慮するeへの対処法」「eへの記念講演の依頼方法」など議題の決定事項やそれに導く提案の話題が、後者には「eが記念講演を辞退する理由」「退職記念講演に関する前例」など議題の一部を情報として参加者間で分け合う話題が含まれる。

## 5. 分析

本節では、前節で分類した各話題に見られる参加構造を分析する。そして、「決定事項の具体化に寄与する話題」では、B, C, Dから提示された話題に対して、会話参加者で社会的地位が最上位のAの見解が結論と扱われるが、「決定事項の周辺にあたる話題」では、各参加者が社会的地位を問わず、当該の話題に詳しい人を中心に話題が展開され、他の参加者もそれに協力する構造であると示す。

### 5.1. 決定事項の具体化に寄与する話題

eの記念講演と懇親会の運営法に直接関わる話題は、B, C, Dが単独または共同で提示した話題の大部分が、参加者の情報所持量を問わず、社会的地位が最も高いAに直接的あるいは間接的に意見を求める形で発せられ、それに対するAの意見が全体を終結に導く。以下、5.1.1では「1人の参加者による話題提示」について、5.1.2では「複数の参加者による話題提示」について、会話例と共

にその参加構造を説明する。

#### 5.1.1. 1人の参加者による話題提示

はじめに、例1で、Cが単独で提示した話題は、その話題への情報量が多い参加者でなく、社会的地位が最も高いAが結論づけていることを示す。

[例1]<sup>5</sup>(記念講演を遠慮するeへの対処法)

【直前に、eがDに記念講演を遠慮したいと伝えていたことを、CはDから聞いて知っている。】

- 01 C: なんか、さつきちょっと、話を、ねえ、私、あのちょっと聞いたら、なんか汚す、汚すだとかね、
- 02 A: うん?
- 03 C: ××、××研究会//を、自分が、その、
- 04 B: //あつ、汚すね。@@
- 05 C: 訳の分からない話をすることによって(0.8) あの、これまでの伝統を汚すことになっちゃいけないだとかね、そういうことをおっしゃってたんで、それは(0.8) あの、謙遜でしょ? 謙遜っていうか、要するに遠慮でしょ?
- 06 A: うーん。
- 07 C: だから、だとすれば「やって下さい」というふうをお願いするのがね//なんか
- 08 A: //うーん。
- 09 C: いいのかなあと思ったり//もするし、
- 10 A: //うん。うん。
- 11 C: だから。
- 12 (1.4)
- 13 A: うん、だから、本気でそういうふうにしてもらっちゃるんだったら、まあ、説得しなく、っていうか//その部分はね。
- 14 C: //うん。そうそう。それでなんかg先生のこともね。

<sup>5</sup> 会話例で用いた記号 (cf. 森下 1999:14)

//: 重複発話の開始箇所

=: 発話の切れ目ない継続

(数字): 沈黙の秒数 (0.5秒以上)

、: 0.5秒未満の沈黙

? : 上昇調           .: 下降調

→: 分析で注目する行

\_\_\_\_: 分析で注目する表現

××: 固有名詞の省略

@: 笑い

<sup>4</sup> 各参加者の役職はデータ収録当時のものである。

Cは、01から11で、Dから聞いた「記念講演を遠慮するeの話」の内容とそれに関する自分の意見を述べている。ここでC(11)は、「だから」という、後ろに帰結部を従える表現で発話を中断し、他の参与者に間接的な形で意見を求めている。それを受けてA(13)は、eが謙遜して記念講演を遠慮しているのなら説得すべきだと意見を出している。そして、記念講演を遠慮するeの意向を直接聞いたDの発言でも、2人の立ち話を耳にしたCの発言でもなく、A(13)が当該の話題の結論になっている。これは、C(14)以降、過去に退職したgによる記念講演に関する逸話という、それまでとは別の角度の話題に移っていることから分かる。

### 5.1.2. 複数の参与者による話題提示

次に、下の会話例で、BとCが共同で提示した話題が社会的地位が最も高いAに意見を求める形で向けられ、それに対するAの発話が当該の話題を結論に導いていることを述べる。

#### [例2] (eへの記念講演の依頼方法)

- 01 C: うん、いや、だからお願いする時も、  
こちらが絶対やっていたらごつもりで
- 02 B: うん。
- 03 C: お願いするのとね、//違うじゃない。
- 04 B: //だから、お身体が  
もし無理で//なければ是非お願いしたい
- 05 C: //うんうん。
- 06 B: ということで//いいんじゃないですか?
- 07 C: //うん。
- 08 A: それでいいと思いますよ。 =
- 09 B: = ね、お身体が//無理だったらば
- 10 C: //うん。
- 11 B: も//う無理にはできな//いけど。
- 12 C: //うんうん。 //うん。
- 13 A: 本当にね、それが健康上の無理なのかどうかさ。
- 14 C: うん、そうですね。わりとすぐ謙遜  
なさる方でしょ、彼女。違う?
- 15 B: いいえ、そうだと思いますよ。
- 16 C: ね?だから本意が本当に
- 17 B: うん。

→ 18 A: うん。

19 (1.0)

20 B: でもなん、それ今回のきっかけは何か  
Dさんの方から確認したの?

01から07でBとCは、体調を理由に記念講演を遠慮するeへの依頼方法について、内容を共同構築しつつ提示している。その中で、B(06)が「ということでいいんじゃないですか」と他の参与者に直接的な形で意見を求めているが、それに対しA(08)は2人の意見を締め括る「それでいいと思いますよ」という表現で答えている。その後、B(09)が前言の内容の繰り返しで確認するが、それが言いさしとして間接的に他の参与者に問かける表現なので、事柄の最終決定権を持つAが13で「本当にね」とBの意見を尊重する表現を添え、今までの内容をまとめる形で答えている。そしてBとCのやりとりが少し続いた後、C(16)が「本当に」で発話を中断し、他の参与者に間接的に意見を求めている。この発言にはB(17)とA(18)が「うん」と言うが、そのうちA(18)の方が話題を終結させており、その証拠に、1.0秒のポーズの後に来るB(20)以降の話題は別の内容に変わっている。

## 5.2. 決定事項の周辺にあたる話題

一方、決定事項からすれば周辺にあたる話題は、社会的地位に囚われず、その話題への知識や情報量が多い参与者を中心に、他の参与者の協力を得て展開する。以下、5.2.1では「参与者Dを中心とした話題展開」について、5.2.2では「話題展開協力者としての参与者A」について、その参与構造を説明する。

### 5.2.1. 参与者Dを中心とした話題展開

はじめに、社会的地位が最も低いDが、情報量が多いことで話題展開の中心になっていることを例3で示す。

#### [例3] (eが記念講演を辞退する理由)

- 01 B: でもなん、それ今回のきっかけは何か  
Dさんの方から確認したの?
- 02 D: いいえ突然

- 03 B: e 先生の方から =  
 04 D: = D さんと言われて =  
 05 B: = あ申し出があった。  
 06 D: はい  
 07 B: だけど D さんに来るのも  
 08 (0.5)  
 09 D: あそれはねその//あれなんです、明日  
 10 B: //おかしいですね。  
 11 D: 合同会議があるということを、あの  
 12 B: ええ  
 13 D: 読まれて、D さんって言って、先に  
 14 B: ええ  
 15 D: 言っとくけれどということで、明日  
 16 B: あ  
 17 D: 先生方の前でもう一度おっしゃる。  
 18 B: ああじゃ//先生の方からお話が  
 19 C: //ああじゃその時に =  
 → 20 A: = その前って合同会議で?  
 21 D: いや

B は 01 から 07 で、e が記念講演を辞退する話をなぜ D が知っていたか質問している。それに対し D は、B による頻繁な確認表現やあいづちなどに導かれつつ、実際に e と話をした人物として当時の事情を説明している。D と B が暫くやりとりを続け C (19) が D (17) や B (18) に理解を示した直後、A (20) の「その前って合同会議で」が出てくる。しかし、これは当該の話題について情報を求める言い方であり、決して例 3 での話題を終結させるものではない。その証拠に、A (20) には D (21) の「いや」という、直前の発話を受けて初めて出てくる否定の答えが続いている。

### 5.2.2. 話題展開協力者としての参与者 A

次に、例 4 で、社会的地位が最も高い A が、情報量の多い B を中心にした話題を展開させる協力者として会話に参加している例をとりあげる。

#### [例 4] (退職記念講演に関する前例)

- 01 B: 日本文学はあの f 先生が固辞したん  
 でしょ。(1.0)  
 02 C: ああ//そうでしたね。  
 03 A: //で結局、先生、出席しなかつた

- んですかね。  
 → 04 B: しなかつたんです。それでちょうど  
 同じ時期に g さんがやめたんだだけ//ど、  
 05 C: //ん  
 06 B: g さんはああいう形でね (1.0) 記念講演、  
 06 C: ん  
 06 B: という//よりも何かちよつとね、違う  
 07 C: //あつ、うーん。 ん  
 08 B: (1.0) 形でやったんですね。あれも××  
 ×××研究会なんですか?  
 09 C: んそうです//×、×、××××研究会で  
 10 B: //あそうですか、じゃあそこ  
 11 C: //おやりになりましたよね。  
 11 B: //でやったんですね。  
 11 A: うーん。  
 12 C: f 先生初めてなんですか?それまでは  
 日本文学でも全部あのやりました?  
 → 13 A: やってましたね。  
 14 C: じゃ f 先生が特別//に  
 15 B: //うん、初めて、の  
 ような//  
 → 16 A: //ま、ま、//あの、僕が来てから、  
 17 B: //ええ。//ああ。  
 18 C: //はあはあはあ。  
 → 19 A: 少なくともね。それ以前のことは知ら  
 ないん//ですけど。  
 20 B: //ああ  
 21 C: うーん、ん彼は何で何か何か//理由おつ  
 22 B: //いや、  
 21 C: //しゃってましたか?  
 22 B: //もう、言わないですね。  
 23 C: ああとに//かく、やんない。  
 24 B: //とにかく私はそういうこと  
 は遠慮させていただきます、それだけ  
 です。

B (01) で過去に記念講演を固辞した教員の話題が提示されたのに対し、A (03) は C (02) と重複して発言する。しかし、それは A が B (01) や C (02) に関する情報を求めるためであると考えられ、事実 A (03) には、当該の話題に詳しい B (04) が「しなかつたんです」と答えている。一方、記念講演の慣例に関する C (12) の質問に

は A (13) の応答が続くが、これで当該の話題は結論に至っておらず、むしろ A が他の参与者よりも勤続年数が長いために、情報を提供する話題展開協力者の立場で発言したものと考えられる。それは、A (16, 19) があくまで自分が知っている内容だけを伝える表現であることから明らかである。また、A (13) と同様、この発言も例 4 の話題を結論づけてはおらず、直後の B と C のやりとりは、B (01) で提示された話題が、それにより詳しい B を中心とした話題展開の中で維持されている。

## 6. 考察

前節では、決定事項に対しその具体化に寄与する話題か周辺にあたる話題かで、参与構造が異なることを明らかにした。この「話題に応じた参与構造の違い」は何に起因するのだろうか。それは参与者間の関係だけによるものだろうか。あるいは、1 つの話題に対する参与者の情報量だけによるものだろうか。それとも、参与者間の関係や彼らの情報量よりもさらに大きな関わりを持つ別の要素が存在しているのだろうか。このことを、制度的場面をそのものとして特徴づけている「参与者間の役割意識と話題との関連性」から考察する。

はじめに、「決定事項の具体化に寄与する話題」では、会話参加者の中で社会的地位が最上位の A が事柄の最終決定権を持ち、たとえ他の参与者の方がある話題に対する情報量が多くても、A から意見が引き出されなければ物事が決定に至らないし、話題も終結しない。このことは、何か物事を決める場合に参与者間に存在する「A が事柄の最終決定権を持つ主任であり、B, C, D は、直接的であれ間接的であれ、A に意見を求める言語表現を用いたり雰囲気を作ったりする」という「役割」なるものを各参与者が認識して、それに忠実に従った結果であると考えられる。

実際、本稿の教員ミーティングでは、A の存在が物事を決定する際に非常に重要であると言える。その証拠に、A は、自分の研究室で打ち合わせの電話を待たために、データ収録の途中で退席するが、その直後から、e の記念講演と懇親会の運営法という「決定事項の具体化に寄与する話題」がほ

とんど見られず、例えば、祝賀会への夫婦同伴での出席についての B の意見、あるいは B や C 自身がどのような形で退職し、記念講演や懇親会をやってもらいたいと考えているかなど、「決定事項の周辺にあたる話題」が多くとりあげられていた。

従って、ミーティングの場面のうち「決定事項の具体化に寄与する話題」では、役割に規定されるところが大きいと、もとの参与者間の関係や社会的地位が話題構築により大きく影響していると言える。

一方、「決定事項の周辺にあたる話題」では、情報交換を主要な目的としているため、「決定事項の具体化に寄与する話題」で見られた参与者間の役割には全く囚われる必要がないものと考えられる。その結果、ある話題に関してより多く知識や情報を有する人を中心に話題が展開され、他の参与者もその展開に協力をすることで、それまで自らが持っていなかった情報を手に入れる方略をとっていると説明できる。すなわち、ミーティングの場面のうち「決定事項の周辺にあたる話題」では、役割に規定されるところが比較的小さいと、ある話題に対して参与者が持つ情報量が話題展開により大きく影響していると言える。

## 7. おわりに

本稿では、「決定事項の具体化に寄与する話題」と「決定事項の周辺にあたる話題」という性格の異なる 2 種類の話題で、話題が展開する際の参与構造が異なることを明らかにした。そしてそれは、話題に応じた参与者間の役割意識の大小に関する違いが、参与者間の関係と参与者の情報量のどちらに重点を置いて話題を展開させるべきかに影響を与えていることに起因すると主張した。

以上の結論は、日常会話のみならず、教員ミーティングのような制度的場面でも、会話が行われる前の参与構造が常に維持されているわけではなく、話題に応じてその構造が変動しうることを示している。それは、これまで日常会話のデータでは取りざたされつつも、本稿で扱ったような制度的場面では考察の対象とならなかった「場中心主

義」、すなわち、その場の状況に合うやり方で会話が行われているという考え方が制度的場面にも存在するという主張につながるものと思われる。

ここで、本論文で述べてきた内容は、先行研究で紹介した Yamada (1992) による銀行の中間管理職の会議を分析した研究に現われていたような、「日本語話者は、話題を問わず 1 人で短めに話順をとり、誰が話題提供者になっても各参加者が均等に話順を配分する」という結論とは異なるものである。その要因として、筆者は、先に指摘したように、Yamada (1992) が「場中心主義」の視点にたつて話題の詳細に触れるということを全くしておらず、場面に応じた参与構造の変化に焦点をあてることなしに分析を行っていたことが大きいと考えている。

しかし、それに加えて、Yamada (1992) の示した結論そのものが、銀行での会議という、より制度的場面に近いと思われるものをデータにしながらも、参加者たちは、筆者が本論文で提示した「決定事項の周辺にあたる話題」における話題展開を選んでいたことによるとも言うことができよう。そして、このことは同時に、ある話題への知識や情報をより多く有する人が中心になるような参与構造を築いた方が、Yamada (1992) が分析した会議での議事はいっそう円滑に進行し、しかも、それが、当該の会議におけるやりとりで期待されている事柄に関する共通知識としての「会話運営方略」であると捉えることができるのかもしれない。もしそうであるならば、Yamada (1992) での相互行為は、本論文で論じた「場中心主義」に完全に等しい概念で説明することはできないであろうが、場を考慮して相互行為を展開させている点で、やはり「場中心主義」が背後に存在していると言っても過言ではないだろう。

では、この、制度的場面に見られる「場中心主義」は、本稿で扱った教員ミーティングだけに限られた傾向なのだろうか。あるいは、制度的場面の全般に特徴的なことなのだろうか。それとも、日本語による会話の全般に特徴的なことなのだろうか。今後は、この点に関して、データの数を増やしたり、英語など他の言語に見られる制度的場面と比較したりすることで、さらに考察を深めていきたい。

# 本稿は、内田 (2000) を加筆修正したものである。

## 参考文献

- 1) Diamond, J. 1996. *Status and Power in Verbal Interaction*. Amsterdam: John Benjamins.
- 2) Drew, P. and J. Heritage. 1992. "Analyzing Talk at Work: An Introduction." In P. Drew and J. Heritage eds. *Talk at Work*, 3-65. Cambridge: Cambridge University Press.
- 3) 森下 雅子. 1999. 「制度的な相互行為 ― 日本語ボランティアグループのミーティング」 お茶の水女子大学大学院 修士論文.
- 4) 村上 恵・熊取谷 哲夫. 1995. 「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62, 101-111.
- 5) Tannen, D. and C. Wallat. 1993. "Interactive Frames and Knowledge Schemas in Interaction: Examples from a Medical Examination/Interview." In D. Tannen ed. *Framing in Discourse*, 57-76. New York: Oxford University Press.
- 6) 内田 らら. 2000. 「話題に対する参与構造の変化: 教員会議の談話から」『日本語用論学会第3回 (2000 年度) 大会 Program & Abstracts』38-43.
- 7) -----・小笠 恵美子・金 志宣・森下 雅子. 2000. 「会議におけるパワー行使と創発的ネットワーク」『言語文化と日本語教育』20, 39-51.
- 8) Watts, R. J. 1991. *Power in Family Discourse*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 9) Yamada, H. 1992. *American and Japanese Business Discourse: A Comparison of Interactional Styles*. Norwood, NJ: Ablex.
- 10) 好井 裕明. 1999. 「制度的状況の会話分析」 好井 裕明・山田 富秋・西阪 仰 (編)『会話分析への招待』, 36-70. 京都: 世界思想社.